

11. T_3 リアキットの使用経験

田辺恵三子 ○春名 桃江

(天理よろず相談所病院・臨床病理部)

稲田 満夫

(同・内分泌内科)

ダイナボット RI 研究所で作製された T_3 の Radioimmunoassay 用 Kit を使用する機会を得たので、その使用経験について報告する。

本法は T_3 と TBG との結合阻害剤として、ANS を用い、又 B と F の分離には Dextran coated charcoal を用いる一抗体法であった。

標準曲線の F/T(%) は T_3 O 濃度ではほぼ30%, T_3 800ng/100ml, ではほぼ70%で, 400ng/100ml まで感度のよい標準曲線が得られた。バセドウ病患者血清を倍数希釈してその F/T(%) を標準曲線のそれと比較すると両者はほぼ平行して変動し、本法での測定値は内因性の T_3 濃度をよく反映すると考えられた。次に T_3 free 血清に T_3 を加え、回収率試験を行ったが、平均回収率は $84 \pm 9\%$ ではほぼ良好であった。本法による測定値の再現性をみると、まづ二重測定値間に有意差はなかった。次に日差変動をみると、 $M \pm SD = 60 \pm 9$, 113 ± 19 , および 700 ± 17 で CV は各々 15.0%, 16.8%, 2.4% で変動はやや大きいと考えられた。

健康男女14人の平均 T_3 濃度は 119 ± 12 ng/100 ml, であった。一方内分泌疾患を除外した入院患者23例のそれは 88 ± 23 ng/100ml, であった。未治療甲状腺機能亢進症患者24例の血清中 T_3 濃度は 479 ± 174 ng/100ml, 又未治療甲状腺機能低下症患者14例のそれは 36 ± 22 ng/100ml, で、よく甲状腺機能を反映した。

T_3 濃度は T_4 濃度とはほぼ平行して変動したが、両者に解離のみられる場合があり、とくに T_3 Thyrotoxicosis の診断に T_3 測定は不可欠である。

12. ^{99m}Tc 標識 Bleomycin による甲状腺腫瘍の診断

○森 徹 小鳥 輝男 坂本 力

鳥塚 莞爾

(京大・放射線科)

浜本 研 藤田 透 高坂 唯子

(同・放射線部)

各種甲状腺疾患患者131例について ^{99m}Tc 標識 Bleomycin 静注後のシンチグラフィーを行ってその腫瘍診断上の有用性を検討した。

検査方法は既報の如く、自家製 ^{99m}Tc -Bleomycin (BLM*) 3~5 mCi 静注後30~60分の間に4,000ホールコリメーター装置ガンマカメラを用いてシンチフォトを作製した。

針生検又は手術で確認した甲状腺癌53例中乳頭状腺癌は88%(29/33), 濾胞状腺癌は94%(16/17) 髄様癌1例及び未分化癌2例は共に陽性で合わせて48例(91%)に BLM* の病巣部への集積を認めた。癌治療例では臨床的に残存の明らかなもの7例中7例, 疑わしいもの7例中5例に陽性で、治癒状態のものは10例中2例のみに集積を認めた。良性疾患における成績は結節性甲状腺腫30例中6例20%に、慢性甲状腺炎は17例中4例24%に陽性であったが、バセドウ病の2例, 単純性甲状腺腫4例は陰性であった。なおヨード有機化障碍の1例に BLM* のびまん性かつ高度の集積がみられた。

^{67}Ga -citrate は甲状腺癌25例中6例(24%)にのみ陽性で分化癌の成績が悪く、また慢性甲状腺炎は8例中5例に集積を示した。針生検と BLM* の比較では甲状腺癌中針生検の診断率は57%に留まったが、針生検で悪性所見を示した2例及び良性と判断された2例にのみ BLM* は陰性であった。一方手術により確認された9例の良性結節例中 BLM* は1例であった。

以上の成績から BLM* によるシンチグラフィーは甲状腺癌診断上極めて有用と判断された。